

---

# とある科学の究極武装（アテルマウェポン）

ぱつつかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とある科学の究極武装アテルマウェポン

【Zコード】  
N5857N

【作者名】  
ぱつつあん

【あらすじ】

神の手違いによって殺された少年『龍崎真夜』<sup>りゅうさきしんや</sup>。いくつかの能力をその手に新たな人生を歩き出す。俺が目指すは原作ブレイクだ！とある科学の超電磁砲の二次創作です。主人公は最強ではないです（多分）

転生…え？ 他の前回ヒストリー？（前書き）

でせぬわー。

転生！えつ？その前にテスト！？

早速だが言わせてもらひついとがある。

いや、言わなければならぬことがあるのである。

「びいなんだこじめ——————つー？」

と、俺が叫ぶと謎の空間で俺の声がまるでまやびの如く響いていた。

そう、俺は先ほどまで自分のベットの上でせんべいを片手に、とある科学の超電磁砲レールガン、のDVDを見ていたんだ。

しかし睡魔と言つ敵が俺を襲撃しつつの間にか寝ていたらしいんだな。

そんでもって次に俺が目を覚ましたらこのあんにもない真っ白な空間にいたつてわけなんだ。

「はあ……。まったくたちの悪い夢だ…」

びつかせながら御坂さんとが出てきてほしかったぜ。

実は俺はとある科学の超電磁砲の大ファンなんだ。

いや、違うな。俺がとある科学の超電磁砲を見るきっかけになつたのは御坂さんが俺のハートを射抜いたからだ。

つまり、俺は御坂さんだけのファンと言つたのだ！

まあ、しかし？とある魔術の禁書目録インデックスの原作を読んで俺は崩れ落ちた。

だって御坂さん、上条さんのが好きなんだよ！？

「あー！！あの旗男がーーっ！！」

と、俺は普段発散できない上条さんのバカヤロオエネルギーを放出する。

ふう、これで少しばかり着いたぜ。

つーか早く夢覚めろよ。

いつまで俺をここにさせん気なんですか？

しかも誰もいない空間に一人きりって…。

放置プレイは好きじゃないんだけどな。

てか俺は攻められるより攻める派だつつの。

ん？俺俺言つてるけどお前は一体誰なんだって？

そつかまだ自己紹介してなかつたか。

俺は、龍崎真夜、だ。

間違つてもママとは呼ぶんじゃねえぞ？

俺の名前はシンヤだ。こんな名前のせいで女に間違われるわ女顔のせいで女に間違われるわ…。

ホント散々だつた…。

「ホント散々だつたのね」

「うんうん。そなたがいるか

……

ん？俺は一体誰と話したんだ今？

確かにここには何故だかは分からぬが俺しかいなかつたはず。

そう思つた俺は後ろを振り返つた。

するとそこには

「イルククウ！？」

何故かゼロの使い魔のタバサの使い魔の人間時の姿のイルククウが俺の目の前にいた。

俺がゼロの使い魔を見るようになつたのはこのイルククウがいたからと言つても過言ではない。

まあ、アニメ版では少ししか出てなかつたのが残念だ。

「私はイルククウじゃないのねー！神様なのねー！」

H A H A H A そんな可愛らしさで言われても信じられないさ  
ん？待てよ？こりは俺の夢の世界なんだからイルククウが神様でも  
可笑しくないか。

「だからイルククウじゃないのねーーー！」

む？心が読まれただとー！？

そんなところがまたかわいいんだなコンチクシヨーーー。

「か、可愛いだなんて照れるのね……／＼＼＼＼＼」

「ぐはあーーー？」

や、やっぱー……。

その照れる仕草がなんとも嘘にはまってしまう。

よし、どうせ夢なら思い切って言つてしまおう。

「あのイルククウ？」

「だーかーらーーー！イルククウじゃなくて神様なのねーーー！」

はい、この際神様だらうとイルククウだらうとどっちでもいいです。

だつてぢりじてぢり可愛いし。

「か、可愛いだなんて何回言われても照れるのね……」  
ぐはあー…やばー、このままでは俺のヒットポイントが〇になってしまひ。

早めに言わなくては。

「あのイルククウ」

「だーかーらー』はい、分かりました神様ですね』分かればいいの  
ね」

このままだとこつまで経つても話が進みそうにないのでとりあえず  
イルククウを神様と認める俺。  
どこもかくにも言つしかない。

「あなたのことが好きです。つかあつてください」

言つちまつたぜ……。

「はっ…、いきなり言われても困るのね……」

顔を赤くして恥ずかしがるイルククウもとい神様…ぐはあー…?

まづいヒットポイントが…。

夢のくせにリアルすぎるぜ…。

「わざわざから思つたけど夢つて何のことなのね？」

今更ですか？神様…。

「いや、この出会い 자체が夢でしょ。だって実際神様に会つてたら俺死んでることになるし」

「うん、君は死んでるのね」

…………えつ？

なんて言つたこの神様？

俺が死んだ？いやあるわけねえよ。

だって俺さつあまでピンピンしてたんだよ？

それなのに死ぬ訳ないだろ…と思いたい…。

「ごめんなのね。実は私がミスして寿命がつきる人を間違えたのね。本当だつたら他の人だつたのね」

……つーことはホントに俺死んだの？

えつ？なにこれよくある展開？

まさか俺がこんなのに比べやすなんて…

「本当だつたらマヤつて言う女の子だつたんだけど君と同じ漢字だ

し顔も女の子みたいだつから間違えたのね。キュイ

やつぱつこ女の顔と以前のせいか――――――

くせう、今まで散々だつたがここまでくるとせ……やつホントに……

ホントみんなのね...

「うん、  
許す」

だつてこんなに落ち込んでるイルククウじやなくて神様見てらんねえし。

ん？神様？と言つ」とはまさか転生できるのか！？

いやいやまさかそこまでつまへ行くわけ……

「どうして転生させるつて分かったのね？」

# 来たぜ俺の時代がなー！！

「いや、向となくですか。でも、どうして轉生されたんだ？」

「本当だつたら死んだ人を転生させるのはダメだけど君は私がミスして死んじゃつたから特別に好きな世界でいいのね」

マジっすか！？

「だつたうとあ『ひょつと待つのね』」

「ん? いきなりビリしたんだ?」

「転生される前に転生する資格があるかテストするのね」

あなた様に殺されたのにテストですか…

まあ、いいけどな。

「このテストにはちゃんとした意味があるのね。まだ生きたいと言う意志が強くないと合格できなくなるから気をつけてほしいのね」

「ああ、分かった。で、テストって何をするんだ?」

「私のペシートと戦つてもいいのね?」

神様はそつぞつと描をパチンと鳴らした。

ついかペシートと戦つてどうこうことだ?

と俺が思つてゐるとい…

ドガアアアアアアン

と壇つかが落ちてきた音が俺の後ろから聞こえてきた。

つつかの効果音からしてかなりのでかさだよね?

そう思つた俺はギギギと首をひねり後ろを確認した。

するといこうか…

「紹介するのね。私のペットのケル・ベロスなのね」

巨大な三首の化け物がいた。

「ま、まままさかとは思ひなれと戦つの？」

俺が怖じ気付きながら戦つと神様は親指を立てて頷いた。

えつ？ こんなと戦つの？

「お嬢じやないが俺、喧嘩強くないしつーかこんなに勝てる訳ないよね？」

「もしへロスちゃんに負けたら地獄行きだから氣をつけてほしいのね」

「ふ、ふざけんな——————つ……」

と言つ声はむなしく「だまして俺の転生か地獄行きかがかかった戦いが始まった……。

俺、地獄行き決定だな……

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

**転生！え？？その前にテスト！？（後書き）**

感想待つてます！

## 能力発現！その名も…

「ギャア―――つー？こんなのに素手で勝てるわけねえだろ――――  
――つー？」

皆さん」んにちは、龍崎真夜です。

只今俺は絶賛逃亡中です。

一体何からかと言つと神様（イルククウ似）のペシトのベロスちゃん、ぶつちやけ化け物から逃げてんだ。

「逃げないで戦わないと転生出来ないのね！頑張つて戦うのね！」

「んな」と出来るか――――――つー？』

こんな化け物相手に素手で戦うなんて命を捨てようつむんだ。

てか武器あつたって勝てるわけねえだろが――――

「ホントに生きたいと思つなら何かの力が出るはずなのね――

何かつてアバウトすぎんだらつが――――

てか力つて神様がくれるんじゃねえのか！？

「私にはそんな権限ないのね！だから君の心のエネルギーを自分の力の形にするのね――」

自分の心のエネルギーを力にするって言つたってやり方わかんねえよー！

俺は逃げるのを止めて化け物に向き直る。

「さあ来い！！俺の力！！」

俺はそう叫びながら手を上にかざした。

■ ■ ■ ■ ■

あれ? なんにもおこんねえぞ?

『グワアアアアアッ！！』

変な」としてはるから化け物に遭いつかれました。

てかマジでほんとかり！？

あんな鋭くて長い爪で引っかかれたら地獄行きどころか死んじまうわ！！

あつ、俺死んでたんだつた。

「一人ゴンヤリでないで早く戦うのねー！」のままだと一生転生出来ないのである。

「んな！」と叫ぶよりも武器もなしにこんな非日常に立ち向かえるか

— — — — —

ああ、キヨンよおまえの気持ちが今よーつく分かつたよ。

お前もこんな気持ちだつたんだなあ

とりあえず追いつかれたので再び走り出す俺。

だつて仕方ねえじゃん。速すぎんだからよ。

だがそんなことを思った刹那、俺の体は地面にたきつけられ化け物に押さえ込まれてしまった。

「がはつ！？」

ヤベエ、冗談抜きでやられる……。

くそつ、こんな不幸な死に方した挙げ句にこいつにやられたら地獄行きだと?

ふざけんな、そんなことになつてたまるか！！

そう思つた瞬間、俺の左手の甲が光り出すのが目に入った。

これはまさか…

「マヤ……今なのね……」

「俺はマヤじやねえ！！ガンダールヴの龍崎真夜だ――つ――！」

俺はそう叫び化け物の腹を蹴り飛ばしその場を脱出した。

そして左手の甲を確かめるとやっぱりガンダールヴのルーンが刻まれていた。

どうやら俺の心のエネルギーはガンダールヴを選んだみてえだな。

「マヤ……デルフリンガー（剣）を抜いて戦つのね……」

「だから俺はマヤじやねえって言つてんだろ……」

俺は神様にそう叫びながらガンダールヴのルーンが現れると同時に俺の手に現れたデルフリンガーを抜き放つ。

そして俺はデルフリを構えながら化け物を見据える。

つーか使い方分かんなかつたのにガンダールヴ効果で使い方が分かるぜ。

「オオオオオオオオオッ！！」

俺はガンダールヴ効果で身軽になつてるので利用して化け物の四肢のしたに潜り込む。

「喰らえ化け物が！！」

そして俺は化け物の腹めがけてデルフリを突き上げた。のだが

ガキンツ

あれ?なんかデルフリが弾かれてるんですけど…

『ガアアツ！！』

「ウニ」

# ガキーン

俺は化け物が爪で俺を引っかこうとするからデルフリーでそれを防いだのだが予想以上にこいつが馬鹿力だったからぶつ飛ばされた。

ヤベエ、手すげえ痺れるんだけど…。

「なあ、神様。あいつ体硬すぎじゃねえ！？」

「うん  
だってケルベロスだからなのね」

「いや、 そうじゃなくて力の使い方知らない俺にそれって強すぎじゃね？」

「うーん……そうかもしないのね」

うん、可愛いから許す

「だからかわいいだなんて恥ずかしいのね……」／＼＼＼＼

うん、そんなとこもまた良いが今はそんなことを言つてゐる場合じゃないな。

俺は俺を切り裂くのを失敗して悔しがる化け物に向き直り「エルフリを構える。

つうかなんか技ないの？

このままじゃせつかく力を手に入れたのに地獄行きになっちゃう…。

あつ、そうだ。

「なあ神様！心のエネルギーって一回だけなのか…！」

もし一回だけじゃないなら技を使えるよつとしてあの化け物を倒す。

「うーん……。心のエネルギーは一回しか生まれないんだけどその心のエネルギーがまだ残ってるなら何か使えるようになるはずなのね」

よし、うと分かりやあ…ん？ そうこや俺さつときは無我夢中だつたから心のエネルギーの使い方分かんねえんだけど…？

や、やっぱこのままじゃ本当に地獄行きになつちまつ。

『ガアアアアアアアアッ！』

「ツー？」

俺がそんなことを考えていると化け物が俺に飛びかかつて来やがつ

た。

それを俺はガンダールヴ効果で身体能力があがつてゐるからギリギリ  
だつたがかわすことが出来た。

だけどこのままじゃ決着がつかねえな。

仕方ねえ、使い方が分かんねえならガンダールヴだけでやるだけだ  
!!

「オオオオオオオオオッ！！」

俺は雄叫びをあげながら化け物に接近する。

そして化け物の目の前まで行くと俺は化け物の真上に飛び上がり落  
ちる勢いを利用して化け物の三つの顔の真ん中を斬りつけた。

『ゴガアアアアッ！？』

よし、効いてるみたいだな！！

もしかして顔面が弱点なのか？

だつたら顔面を集中攻撃だ。

「ハツ！！」

俺はさつき傷つけた顔とは違う顔を躊躇なく斬りつけ。

すると今度は血がまるで噴水のように噴き出してきて俺の視界をつ

ぶしやがつた。

やばこーーーのままだと狙い撃ちされる！？

そう思つた俺は狙い撃ちされないためにがむしゃらに動きながら田についた血を拭く。

そしてようやく視界を確保できた俺の脇を化け物が通り過ぎていった。

へつ、さまあみろつてマズい！？

何がマズいと言つと俺の脇を通り抜けた化け物がそのまま神様に向かつていつていたのだ。

しかも俺にやられて頭に血がのぼつてるのか主人かどうかも分からなくなつてゐらしい。

「神様！…危ねえ！…」

そう、俺が叫ぶが神様は何故か避けるそぶりを見せない。  
何やつてんだよーー

と、思ったが神様の足が震えていたことに俺は気づいた。  
ビツやつ恐怖で足が竦んでいるよつだ。  
だけどその間にも化け物は神様を食い殺さうとしている。

たとえ神様でも死にはしないかもしないけど痛みを感じるはず…。

そこまで考えると左手のルーンが光りそれと同時に俺は化け物と神様の間に一瞬で入りデルフリで化け物の一撃を防いでいた。

どうしてこんな速さで動けたかは分からぬ。

ガンダールガの効果でここまで速さは出なかつたしね。

だけどやる事は一つだけ…。

「こいつを氣づけるのは俺が許さない」

俺はそつと化け物を押し返してデルフリを鞄にしまつ。

「マヤ、ありがとなのね／＼／＼／＼

「だからマヤじゃねえって。まあいや、今は下がつてくれ。これは俺のテストなんだからな」

俺は赤くなつて、この間にか使い方が分かるようになつたもう一つの技を使つ。

「神鳴流奥義【斬空閃】！！」

俺がデルフリを一気に抜き放つとデルフリの刀身から斬撃が放たれ化け物の足の一本を切り裂く。

どうやら俺の心のエネルギーはもう一つの力を魔法先生ネギまーの神鳴流を選んだようだ。

「お前を倒して俺は転生する……」

俺は足を切られ苦しんでいる化け物にガンダールヴの身体能力向上を使い一気に近づく。

そして…

「神鳴流決戦奥義【真・雷光剣】！！」

俺は真・雷光剣を使い化け物を跡形もなく消し飛ばした。

だが化け物を倒して気が抜けたのか俺の足から手から全ての力が抜けて俺は膝をついてへタレ込んでしまった。

「はあ…はあ…はあ…。やつた、のか…？」

俺は半信半疑になりながら誰に問いかけるわけなくつぶやいた…。

初めて見た生き物、初めて見た異質、初めての経験…。

そして初めての戦いでの勝利…。

「やつた…。勝つた…。勝つたんだ―――つ――！」

俺は大の字になりながらその場に寝転がった。

そう、俺は転生するためのチケットを手に入れたのだ。

「お疲れ様なのねマヤ」

「だから俺は…つてまあ、いいや」

俺は今最高に気分がいい。

こんなすげえ力を手に入れたしそれに何より転生出来るんだ。

「おめでとうなのね。マヤは一人目にこの試験を合格した合格者なのね」

「へ？俺が一人目？」

どういうことだ？

「実は今までのことは全部計算通りだったのね。君がピンチになるのも私が襲われるのも」

「なんだ…」

「ん？だけどどうして前に来た奴らは不合格だったんだ？」

俺より強い力を得た奴なら簡単に倒せるはずだ。

一人目の合格者同様に…。

「うん、マヤの力よりも強い力を出した人はいるのね。だけどその人たちは力に溺れて自滅したのね」

「なるほどな。つまり俺は力に喰われなかつたってわけだ」

ようやく地獄行きの意味が分かったよ。

これはただ単に地獄に行くわけじゃない。

力に食われて存在そのものが消滅するつことだつたんだ。

「まあ、ともかくにも俺は転生出来るんだよな。去れ（アベアツ  
ト）」

俺が呪文を唱えるとデルフリがカードに変わる。

まあ、これも俺に身についた能力みたいだな。

「そりなのね。だけど転生先はどうにするのね？」

そんなものは決まつてますとも。

「とある科学の超電磁砲レールガンの世界に転生させてくれ」

「分かつたのね。だけど転生する前に言つておくことがあるのね」

「言つておくことがある？なんか嫌な予感がするんですけど。

「本来世界にいない人がいきなり世界に出てきたら世界のバランス  
が崩れるのね」

ふむふむ、すげえ嫌な予感だ。

「だからバランスが崩れて発生した問題を解決してほしいのね」

あー、そう言つ「」とね、うん。

「ダメかな？」

いえいえ、あなた様の頼み」とならたとえ火の中、水の中だりつと成し遂げてみせます。

「大丈夫です」

「ありがとなのね！！」

「わっ！？神様つ／＼／＼／＼

いきなり抱きつかないでください！？

柔らかいものが俺の肘にぶつかってるんですけど！？

「『』、『』めんなのね／＼／＼／＼

そのよつて照れるあなた様はとてもかわいらしくです。

「じ、じゃあ早速転生させるのね」

「お願いします」

すると俺の体は透けていきだんだん見えなくなつていぐ。

最後に神様、俺はあなたを恨んでないからな。

「ありがとなのね、マヤ

だからヤバいやないって。

まひ、ここや。

そして俺は丘の空闊から完全に炎を消した。

ハハハ…

能力発現！その名も…（後書き）

感想待つてます！

## 主人公設定

名前… 龍崎真夜

身長… 165cm

体重… 54Kg

眼の色… 黒

髪の色… 黒

髪型… 魔法先生ネギま!の犬上小太郎と同じ感じ。

顔… 上の下（女顔）

好きなもの… 昼寝、静かな場所、甘いもの、美少女

嫌いなもの… 昼寝の邪魔をする人、たけのこ

性格… 普段はちやらんぽらんな奴だが戦いなどになると真面目になる。

またシンヤをマヤと呼ぶとキレる。

能力… LEEVEー3の『瞬間武装

カードから武器を取り出す様子からそのよつて名付けられた。

また武器を取り出した後身体能力があがることから「EVE」3認定されている。

カードとは魔法先生ネギま！の仮契約カードと同じ機能が備わっており、来れ（アテアシト）で武器を取り出し、去れ（アベアシト）で武器をカードに戻すことが出来る。

またカードで武器を出すとき頭で念じるとその武器が出るが片手で扱える程度の武器しか出ない。

ほとんどのゼロの使い魔のデルフリンガー（剣）が出る。

デルフリンガーを出した場合のみ魔法先生ネギま！の神鳴流を使えるようになる。

こんな感じです！

質問があったらぜひ聞いてください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5857n/>

とある科学の究極武装（アテルマウェポン）

2010年10月11日04時50分発行